

俳人協会會報

1966年

1月

No. 14

第一回 関西俳句大会

予想外の大盛会

協会主催、朝日新聞社後援の第一回関西俳句大会は十一月二十七日午後一時より、大阪城にほど近い大阪府農林会館講堂で行われた。関西での始めての大会として、各結社の主力メンバーが互に協力して委員会、小委員会を幾度となく持ち、準備を整えたが、出句数は全く想像も出ず不安が付きまわった。朝日新聞社社告、各俳誌誌告等で御協力を得たが、何と云っても発表より切までの日数が少なかったのも心配であった。にもかかわらず、二五三四句という多数の応募を得て会する者四百を数える大盛会となった。米沢吾亦紅氏を中心に動いた各委員の安堵とよろこびはかくすべくもなかった。

最近発掘され確認された謎の都趾、難波の宮々趾に建てられた農林会館の辺は、この日スモッグも無く秋麗の好日であった。大会は浦野芳南氏の司会で、大会の委員長米沢吾亦紅氏の開会の辞ではじめられた。次に水原会長が御都合で不参加なので、わざわざ来阪された秋元不死男氏が別掲のごとき挨拶を代読された。続いて顧問の阿波野青畝氏より挨拶があり、和平と伝統の尊重を述べられた。講演に移り、「安西冬衛の詩業」と題して山口誓子氏より、本年夏に歿せられた関西の詩人安西氏の詩法と俳句との関連について興味ある講演があった。

次で入選作品の発表が各選者によって披露され、簡単ながその選評は参会者に深い感銘を与えた。水原氏の選評は米沢氏が原稿を代読された。時間の都合上御出席の秋元、山口、阿波野の諸氏の選評が省略されたのは残念だった。最後に表彰式に移り、朝日新聞社賞の松浦由美子さんへ朝日新聞社より賞状賞品が授与され、俳句大会賞は、浜地潮香氏、平田想白氏に秋元不死男氏より賞状賞品が授与され全堂の拍手を浴びた。右城暮石氏の閉会の辞で会を閉じた時は、全く予定通りの時間であった。

なお協会よりは秋元氏、皆吉氏と共に岸田稚魚氏を御派遣いただいた大会を飾ってもらった。

この後会場をこれも新設の厚生会館に移し懇親会を催した。選者、来賓、委員と共に、受賞者三名を囲んで、一般来会者もまじえて歓びを分かちあった。各選者から大会では省かれた話など語られ、関西大会の意義を深く感じた。

なほ朝日新聞では受賞記事を翌日に、又大会記事と入選作品の若干を後日に報導した。(見市六冬報)

選考経過

応募のあった二千五百三十四句を全部印刷した無記名の投句集を全選者二十四名に郵送、全投句の中から、おのおの入選二十句、特選二句を選んでもらい、その入選特選を勘考して、朝日新聞社賞一名、関西俳句大会賞二名を決定しました。(ただし、高浜年尾氏選には特選なし。)

なお、投句と選句を併せ印刷した「第一回関西俳句大会句集」を印刷、後日全投句者に配布しました。受賞者及び受賞感想は別掲の通りです。



大会の開会まで

米沢 吾亦紅

俳人協会主催、朝日新聞社後援、第一回関西俳句大会と書き出すといかにも鹿爪らしく聞えるが、
噛み砕いて、下世話に言えば……。

御挨拶

水原 秋桜子

今日の御盛會を想像しつつ、はるかに御挨拶を申しあげます。
関西俳句大会を開催していただくことは、私達のかねてからの念願でありました。これは伝統派の作者諸君のためにも、また協会のためにも、必ず好い結果になるであろうと考えたのでしたが、予想どおり多数の方々の御参加下さいましたことは、ひとえに幹部の諸兄の適切な御企劃が実を結んだものと思えます。この会が基礎になりまして、今後ますます伝統の精神が堅持

ある地方に、地方まわりの役者を相手にする小芝居小屋の親方がいた。その親方に事もあろうに本場の太芝居興行の口がかかって来た。日頃大言壮語をしてい

され、且つ榮えて行くことを、かたく信ずるものであります。

今日は私も参上して、盛會をまのあたりに拝見したいと思ひますし、また昔から尊敬して居ります方々と、久しぶりに御目にかかつて、歓談したいことは山々であります。長途の旅の直後でありますため、まことに残念ながら馳せ参ずる氣力をふるいおこすことができません。年老いては致し方ないことと御賢察の上、お許し願いたいと存じます。

かつて四十幾年か前に、京都で行なわれまして大きな會に出席して、関西流の句會運びの見事さにおどろいたことがあります。今日はそのときの披露を担当した皆吉爽雨君が、秋元不死男君と同道で、東京を代表して参上いたしました。両君に托して私の御挨拶を申し上げる次第であります。

る親方、今更後に退くわけにもゆかず、土地の大劇場の番頭さん達に相談を持ちかけた。「我々番頭達が一肌脱ごうじやありませんか。土地のためだ。おやんなさい」と発破をかけられ親分怖る腰をあげた。番頭さん達の動きは見事なものであった。早速寄り合つて、ピラ係り、宣伝係、小屋係り、役者衆係りと、手際よく慣れた手際でサツサと片づけてしまった。切符の売れゆきも非常によい。親方は只茫然と眺めているだけである。

窓々開幕の日である。入りも十分である。カーン、カーンと桁が入ったが、親方ついぞこんな透きとほつた、腹に沁み込む音の音を聞いたこともなかった。幕が開いた。何と見事な書割であろう……。何もなかった親方「何と見事なものだ。これだったら来年も一興業打たずばなるまい。」いい気なものである。親方は自分がやったような大きな錯覚に陥っている模様だ。

と、云うことになるが、
四角張つて袴をつけて口上ナ申し上げるとすると……。

八月の中頃、協会本部から関西俳句大会開催の電話があり、つづいて十六日桂郎先生から詳細の連達が届いた。同二十四日夜、本部の爽雨先生、源義先生、桂郎先生と地元の天野真秋子氏、野尻遊星氏、本田青嵐氏（共に天狼）、西矢籟史氏（河）植原抱芽氏（雪解）森田峠氏（かづらぎ）辻田克己氏（氷海）沢田弦四郎

氏（馬酔木）三好潤子氏（天狼）と私が膝を交えて会合した。驚いたことに、開催日、会場決定予約、投句締切日、選者選定、役割決定が、スルスルと、僅々三時間ばかりで決つてしまったことである。普通であれば此処までが大変な仕事で、まず一カ月の仕事と見てよい。ここまで出来たら地方の会はもう半分出来たも同然であるが、見ず知らずの、しかも派を異にしている人達が集まり、これもスムーズに事が運ぶとは、やはり大阪俳壇のよさである。各役割に対しての仕事も互に十分の連絡をとり合い、何一つの躓きもなかったことは大阪俳壇は大人であるの感を深くした。その後には浦野芳南氏、藤野基一氏、宮井港青氏、大竹きみえ氏（共に雪解）見市六冬氏（万緑）の諸氏が委員に加わり益々強固な陣立てになつた。

朝日新聞に発表されたのが九月十一日、これが外部に対する第一声であった。まさかと思つていた第一の投句者が十三日にあったのは驚いた。まさに響に応ずるとはこのことであろう。それから締切日十月十日まで毎日切れることのなき投句で、終には整理が追いつかずもう御免蒙りたいと嬉しい悲鳴をあげた次第。総投句者千百人を越え、投句数二千五百三十四句となった。これでも二十名ばかりの方々に締切後のため御引取りを願わざるを得なかった。

○朝日新聞社賞

さそはれしごとく灯の点き

秋の暮

堺市 松浦由美子



私はまだ俳句というものがおぼろげながらわかりかたに過ぎません。わかりかけて思いますが、この道が行けば行くほど奥深いというところでございます。そして私が何処まで歩いて行けるかという不安と心細さを感じつつも、私は私なりに行きつける所まで努力する覚悟でございます。未熟な私ゆえ先生方をはじめ皆様の御指導をこの上ともお願い申し上げます。

(略歴) 昭和二年生。主婦。出生地愛媛県。所属「磯菜」。勤務先 自民党堺支部。現住所、堺市浅香山町二丁目五番十四号。昭和三八年「磯菜」に入門、現在に至る。

○関西俳句大会賞

病人の拭きころがされ

爽かに

福岡市 浜地潮香



受賞句は今年八月末より九月中旬にかけてヘルニヤ手術のため入院中の句でいわば感謝の実感句です。この句のよさはどこにあるかは存じませんが、はからずも青柳、桜坡子両先生のおめがねにかないましたのは、この句が嘘の句ではなく実感体得の句であることに目をとめてくださったものと感じ入っています。入賞の榮譽を更に有意義とすべく、今後の研鑽を続けたいと存じますので、諸先生の御指導の鞭のきびしからんことをお願いします。

(略歴) 本名毅嘉。大正元年生。出生地福岡市。所属「かつらぎ」。勤務先 大石産業(株)段ボール事業部。現住所 福岡市今宿青木六四二の八。昭和十年「同人」

に投句、十一年より「ホトトギス」に転じ、三十六年より「かつらぎ」に拠る。「かつらぎ」同人、福岡かつらぎ会幹事。

○関西俳句大会賞

菊売の荷を置きて入る

朝の弥撒

大阪市 平田想白



私たちの燕巢会はよく吟行に出かけますので私の句も吟行で得たものが多いのです。古美術が好きで奈良、京都をよく題材に採りあげるのでありますが、この句は長崎の大浦天主堂での触目で長崎はこれからはよんでみたいところです。授賞を機縁になは一層努力したいと思っています。

(略歴) 本名栄二郎。大正十三年生。出生地大阪市。所属「馬酔木」。洋菓子製造自営。現住所大阪府都島区東野田四の五〇。昭和二十一年「馬酔木」入門。四十年「馬酔木」同人となる。米沢吾亦紅主宰「燕巢」の編集委員。

第五回
全国俳句大会

第五回全国俳句大会を左記の通り開催します。これは俳壇の主要結社が合同して、しかも全国的な規模で行なう俳句大会です。奮ってご応募願います。

- ▽応募 二句一組(雑詠・未発表のもの・原稿紙使用)何組にても可。
- 会費二百円を同封して、東京都渋谷郵便局私書函三二号、俳人協会「全国俳句大会」係宛三月三十一日(当日消印有効)までに送ってください。
- ▽選者 ほぼ昨年通り(次号発表)
- ▽発表 五月二十九日(日)午後一時より朝日新聞東京本社講堂で行ないます。
- ▽賞 入賞者には俳人協会俳句大会賞・朝日新聞社賞・特選句には各選者の短冊。
- ▽大会当日の講演については次号に発表します。

主催 俳人協会
後援 朝日新聞社

会員の声

○ 橋本鶏二

俳人協会の大会がこんど大阪で催されることになって、大変いいことだと思えます。私の住んである東海地方はまだ会員もすくないのですが、この次にはいい機会に名古屋でも大会をやってほしいと思えます。

関西俳句大会の選考方の名前を拝見してをりますと、ほとんど皆存じあげている方々で、協会の意志とか指向とか言うものが、かなり苦心されて組み立てられていると言ふうに思えます。協会は、性格的に広い意味の伝統派たるの自分を尽す人々の世界だと思いますが、そういう領域が強くひろがりつつ会員の殖えてゆくことをも又望まねばならないと思えます。いつの場合でも大会と言うのは、協会の持つべき本然のものを高揚すべきで、その力こそが本当に協会存立の意義だと思えます。成功を祈つてやみません。

○ 加畑吉男

協会に対する意見とのことであるが、すでに何人かの方達によって意見が述べられ、私として特に目新しい意見の持ち合せもないけれど、思っていることを述べてみよう。

協会賞を新人賞に この賞は過去一カ年間、俳壇的に立派な業績を残した作家に与えられることになっており、新人、既成作家たるを問わないことになっている。そして過去四回中三回

まで、大家、中堅作家が受賞している。もちろん秀れた業績の顕彰であるから、大家、中堅何れでも結構なことには違いないが、俳句の将来を考えた場合に、新人により多く場所を与えた方がよいのではないか。従って協会賞を新人賞に性格変えしては如何であろうか。

幹事増加し、若手を 現在の協会幹事諸氏に対してなら異議を差し挟むものではないが、五〇〇名の会員に十二名の幹事は少ないのではあるまいか。そこで、三十代、四十代の若手会員からも、幹事を推薦して、増員しては如何であろうか。そして若手に広い活躍の場を与えて欲しいと思うのだが。

協会と会員との密着を高める

慶 祝

水原秋桜子会長が一月に芸術院会員に推されました。ひとり本協会の榮譽にとどまりません。ここに全幅の祝意を表します。

俳人協会

ために 従来協会と会員は、必ずしも密着した状態にあったとは言えないと思う。これはすでに二、三人からも発言があった。そこで甚だ抽象的な言い方

だが、より多く全会員の意志を徴する運営方法にもついても、如何であろうか。例えば会員、幹事、協会賞選考委員等の推進などに全会員の意志をも加味する行き方も、一方法である。

会報をスツキリしたものに

スペースが狭少なのであるから、報告的なもの、二番煎じ的な記事は極力縮小し(或いは全廃して)短かい評論を一篇か、ときには随筆等を載せて、有意義な紙面にした方がよいと思う。

寄贈誌

山火・新樹林・万緑・鶴・鹿火屋・面・運河・夏炉・早苗・蘇鉄・白壺・自然味・地帯・獺祭・みちのく・京鹿子・若楓・地帯・新曆・北鈴・山茶花・春燈

寄贈著作

○大須賀乙字伝 村山古郷著
発行所 俳句研究社(東京都新宿区筑士八幡町八)

定価 七八〇円

○句集「行く鳥」羽村野石著
発行所 獺祭発行所(東京都板橋区加賀二ノ四ノ七)
(非売品)

○句集「信濃川」神保愷著作
発行所 春燈社(東京都目黒区柿ノ木坂三ノ四ノ一四)

頒価 五百円

○句集「喬木」堀 喬人著
発行所 浜発行所(横浜市中区川区白幡南町九二)

頒価 七百円

○瀧本くみ子遺句集
「コスモス」

発行所 七曜俳句会(豊中市大字小曾根一八ノ三四)
(非売品)

○辻井夏生句集

発行所 万緑発行所(武蔵野市緑町二丁目三番一ノ三〇)

二)

頒価 四八〇円

○句集「野峯」藪本三牛子

発行所 木食俳句会(和歌山県伊都郡高野町口町)

非売品

○信濃句集 長野県俳人協会編
発行所 長野県俳人協会(長野市権堂町二二二五ノ二渡

辺方)

定価 六〇〇円(送料共)

飛島

秋沢猛

飛島は山形県酒田港から海上二十哩の北に浮ぶ孤島である。周囲十軒、長径三軒、短径二軒、面積一、三六平方軒という日本全土の地図を見ても載っていないほどの小島である。飛島という名は、山形県と秋田県の県境に聳える鳥海山が噴火した時、山頂に近い山の一部分がすっ飛んで、日本海上にとぼりと落ちてきた島だからだといっているのであるが、おほらかで、おもしろい伝説である。人口は一、六〇〇で今では酒田市の一部になっているが、電灯がとまるようになってしたのは、つい四、五年前のことである。島の人の生業はいうまでもなく漁業である。申しわけのように島の中央部の高地に陸稲の畑地があり、黍や馬鈴薯を作っているが、これらは自家の消費用にも足りない。男と女は四季を通じて海に出て

いる。冬の吹雪の時には彼等は本州へ出稼ぎに出るか、北海道の漁業に雇われるかして島にはいない。だから、何時行っても少数の漁師以外は働き盛りの男達の姿を見かけない。老人と女と子供だけが、ひっそりと生活している。犬も猫も見かけないのは、それらを飼うに足る食物の余裕がないからである。浜の砂に坐って黙々と網を繕らっている老翁、鳥賊を地上の筵に乾し並べている海女の姿が島へくる観光客の眼にすぐ映る。だまりこんで、こつこつとさえずを割っている背の曲った老婆の姿がさびしい。

島貧しと背で云ふささげ
割りながら 不死男

島には水が乏しい。湧き水は少量で濁っている。雨水が貴い。山の岩肌を伝ってくる水を受け

貯めているが、旱天が続くと絶えてしまう。だが植物は不思議に多い。海岸の狭い、わずかな土地を除けば丘陵形の島全体がいつも樹木に覆われている。樹木の種類も多い。日本海側の北限といわれるヒサカキ、モチノキ等が茂り、同時に南限の植物として、ハマベンケイソウ、ハマキンバイ等が繁茂している。

島の生活で変わっているのは女子消防隊の存在である。男子がいつも海に出ているため自然に生まれた組織であろうが、隊長もホース持ちもすべて女である。島で火災が起り彼女等の活躍したことを耳にしたことはないが、暇を見てはこの女子消防隊は訓練を重ねている。婚姻は庄内地方の農家との間に多いとこのことであるが、島内だけの婚姻も多い。結婚は酒、鯛、昆布と定っており、婚約が整った日から男は女の家へ泊りに行くのが習わしであったが、今ではそういうことはしない。葬式を島では「のとぶらい」と言い今でも土葬である。その時縁者達は三晩三晩墓地の附近で野火を焚く。以前は島の労力不足を補うため、本州から年々ぎめの貰い子をし、五、六才から兵隊検査の二十一才まで漁業の手伝いをさせ元の家へ帰す風習があったとのことであるが、今は無い。これら

の貰い子はいつも南京袋の前掛けをしていたことから、南京小僧と呼ばれたが、この名は今でも島に残っていて、島を訪れる人の旅情を誘う。島の表——本州側に勝浦という港があり、酒田からデーゼルの定期船で二時間で行ける。この定期船を迎える真夏の頃の勝浦の蟬時雨の激しさは観光客のどきもを抜く。

孤島行甲板日覆に赤目の蠅
不死男

島の西側には賽の河原という一望石、石、石の海岸があり、すぐ眼の前に海猫の繁殖地として文部省から天然記念物として指定されている御積島があり、

その島と飛島の間の海の碧さは眼に沁みるようである。

ひとつ積んで灼け石の
音母の声 不死男

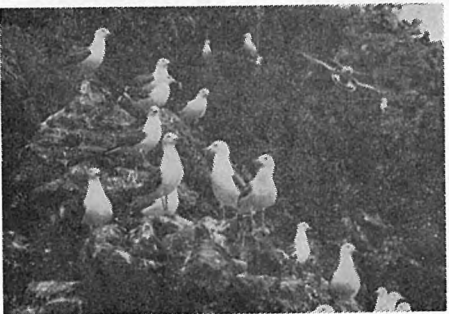
島の裏——日本海側は法木という漁村で、岩礁の多い遠浅で暗灰色の海が果てしなく北へ広がっている。

羽根ひろく岩礁の鵜の
黒十字 不死男

秋元不死男先生がこの島を訪れ、「飛島五十句」を「俳句」に発表したのが昭和三十五年であったが、その後この島を訪れる俳人は勿論文人、画家の数は非常に多い。



(法木部落)



(御積島の海猫)